

6 調査を実施した学校・児童生徒数

	小学校（校）	児童（人）	中学校（校）	生徒（人）
全国（公立）	20,005	1,061,301	9,691	1,016,737
北海道（公立）	1,076	42,068	606	40,966
帯広市	26	1,299	14	1,357

※表中の児童生徒数は、回収した解答用紙が最も多かった教科の解答用紙で算出したもの。

（札幌市を含む）

7 調査結果に関する留意事項

【昨年度との比較について】

- 平成26年度から、本市全体の平均正答率の数値を明らかにした他、これまでも平均正答率等の数値を示しているが、これらの数値のみで必ずしも調査結果のすべてを表すものではなく、中央値、標準偏差等の数値や分布の状況を表すグラフの形状など他の情報と合わせて総合的に結果を分析・評価する必要がある。また、個々の設問や領域等に着目して学習指導上の課題を把握・分析し、児童生徒一人ひとりの学習改善や学習意欲の向上につなげることが重要である。

【結果のとらえ方について】

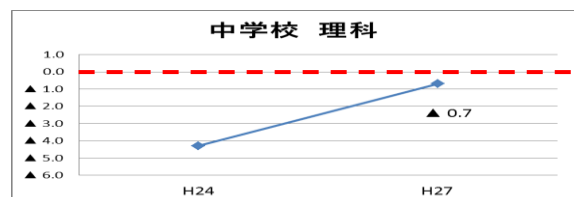
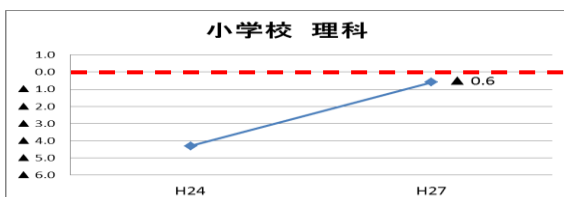
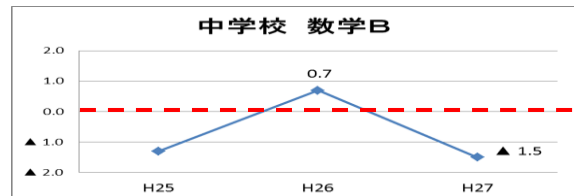
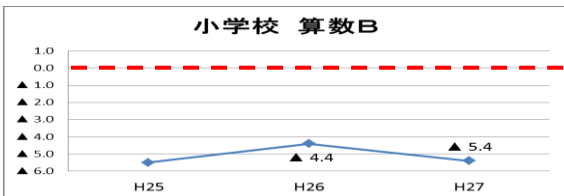
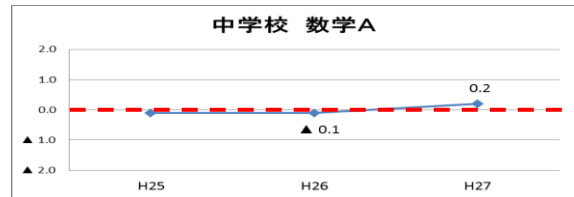
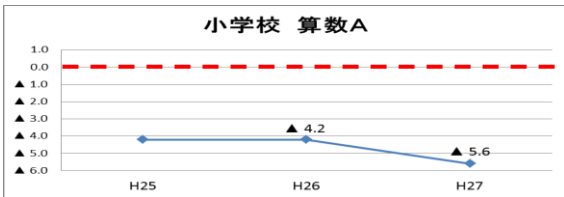
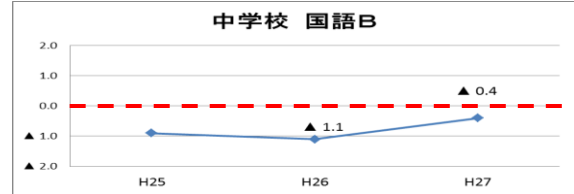
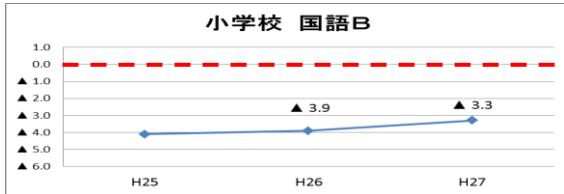
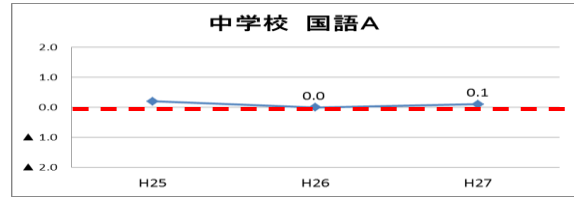
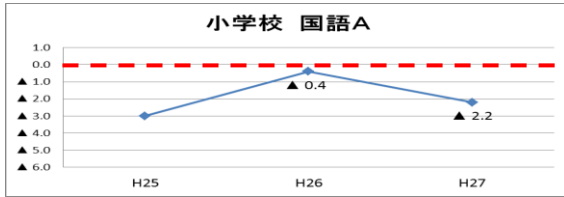
- 本調査の結果については、児童生徒が身に付けるべき学力の特定の一部分であることや、学校における教育活動の一側面であることに留意する必要がある。

II 平成27年度 調査の結果

1 各科目の平均正答率

	小学校					中学校				
	国語 A	国語 B	算数 A	算数 B	理科	国語 A	国語 B	数学 A	数学 B	理科
全国	70.0	65.4	75.2	45.0	60.8	75.8	65.8	64.4	41.6	53.0
全道	68.1	63.0	72.3	42.5	59.3	75.8	65.7	63.0	39.7	53.3
十勝	67.9	62.3	70.0	40.1	60.7	76.7	66.8	65.1	41.4	54.6
本市	67.8	62.1	69.6	39.6	60.2	75.9	65.4	64.6	40.1	52.3
十勝差	-0.1	-0.2	-0.4	-0.5	-0.5	-0.8	-1.4	-0.5	-1.3	-2.3
全道差	-0.3	-0.9	-2.7	-2.9	+0.9	+0.1	-0.3	+1.6	+0.4	-1.0
全国差	-2.2	-3.3	-5.6	-5.4	-0.6	+0.1	-0.4	+0.2	-1.5	-0.7

【全国と本市の平均正答率の差の推移】



2 児童生徒の学力の状況の概観

【小学校】

- 5科目ともに全国平均を下回った。
- 特に算数はA・Bともに、全国平均と比べて5ポイント程度離されている。
- 単純に比較はできないが、国語・算数4科目のうち国語Bを除く3科目で、昨年度と比較すると全国平均との差が広がった。
- 理科は、全国平均との差が-0.6ポイントで、5科目中最も全国平均に近かった。

【中学校】

- 5科目中、国語Aと数学Aで全国平均を上回った。また、国語Bと理科は全国平均を下回ったが、その差はそれぞれ-0.4ポイントと-0.7で、ほぼ全国平均に並んだ。
- 昨年度は全国平均を最も下回っていた国語B（昨年度-1.1ポイント）において、今年度はその差を-0.4ポイントまで縮めた。
- 昨年度最も大きく全国平均を上回っていた数学B（+0.7ポイント）において、今年度は最も大きく全国平均を下回るという逆の結果となった。（-1.5ポイント）

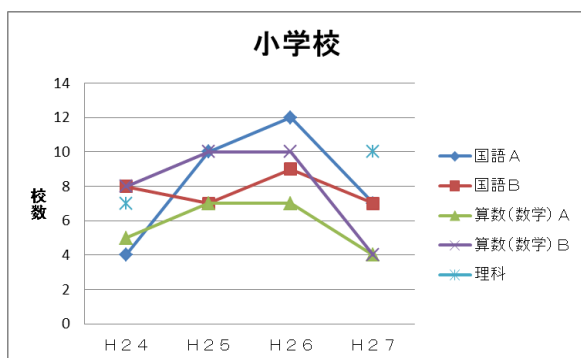
【市内小中学校における平均正答率のばらつき】

- 全国平均を上回った小学校は、国語Aで7校(−5)、国語Bで7校(−2)、算数Aで4校(−3)、算数Bで4校(−6)、理科で10校(+3)であった。
平均正答率が最も高かった学校と最も低かった学校の差は、小学校で25.0(理科)~34.0(国語A)ポイントである。
- 全国平均を上回った中学校は、国語Aで9校(+2)、国語Bで6校(+1)、数学Aで8校(−1)、数学Bで4校(−7)、理科で7校(+1)であった。
平均正答率が最も高かった学校と最も低かった学校の差は、中学校で15.7(国語A)~35.8(算数B)ポイントである。
- 全道平均を5ポイント以上上下回った小学校は、国語Aで3校(−1)、国語Bで9校(−1)、算数Aで12校(+5)、算数Bで12校(+4)、理科で5校(−5)であった。中学校では、数学Bで1校(±0)、理科で1校(−3)、国語A(±0)、国語B(±0)、数学A(−1)は0校であった。

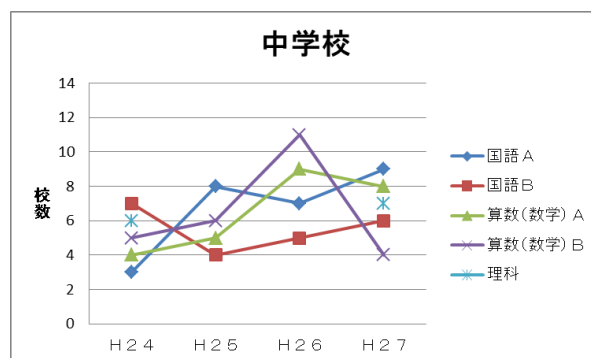
※ () 内の差を示す数値は平成26年度調査結果との比較。但し、理科のみ平成24年度調査結果との比較。

■ 全国平均を上回った校数の推移 (校数)

	小学校				中学校			
	H24	H25	H26	H27	H24	H25	H26	H27
国語A	4	10	12	7	3	8	7	9
国語B	8	7	9	7	7	4	5	6
算数(数学)A	5	7	7	4	4	5	9	8
算数(数学)B	8	10	10	4	5	6	11	4
理科	7			10	6			7



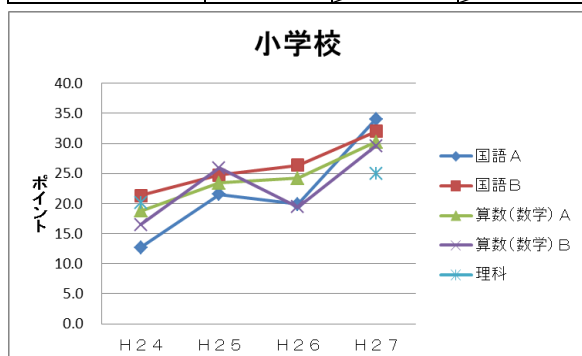
小学校においては、昨年度と比べて、理科を除く4科目全てで全国平均を上回った学校数が減少した。



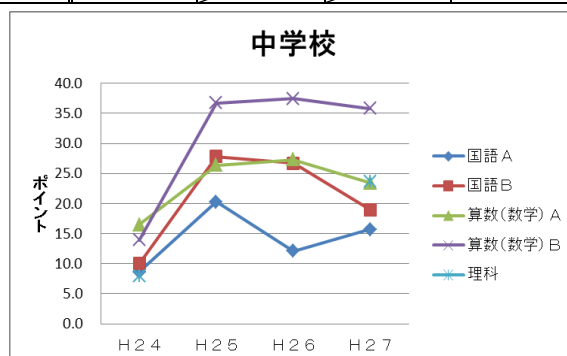
中学校においては、昨年度と比べて、理科を除く4科目中、国語A・Bで全国平均を上回った学校数が増加した。

■ 平均正答率が最も高かった学校と最も低かった学校の差の推移（ポイント）

	小学校				中学校			
	H24	H25	H26	H27	H24	H25	H26	H27
国語A	12.7	21.5	19.9	34.0	8.6	20.3	12.1	15.7
国語B	21.3	24.7	26.4	32.0	10.0	27.8	26.7	19.0
算数(数学)A	18.8	23.4	24.2	30.2	16.5	26.4	27.3	23.4
算数(数学)B	16.5	25.9	19.4	29.6	13.9	36.7	37.4	35.8
理科	20.1			25.0	7.9			23.6



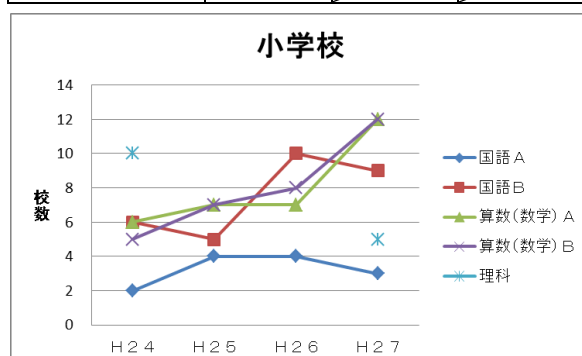
小学校においては、昨年度と比べて理科を除く4科目全てで、差が開いた。



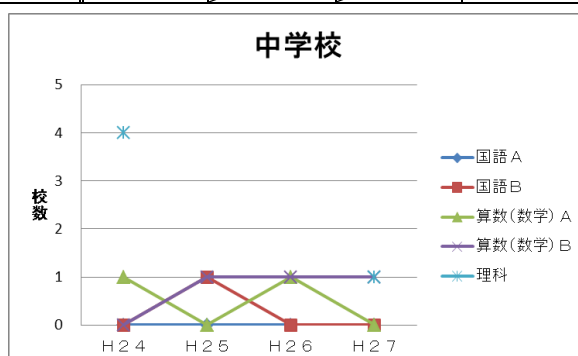
中学校においては、昨年度と比べて理科を除く4科目中、国語A以外で、差が縮まった。

■ 全道平均を5ポイント以上、下回った学校数の推移（校数）

	小学校				中学校			
	H24	H25	H26	H27	H24	H25	H26	H27
国語A	2	4	4	3	0	0	0	0
国語B	6	5	10	9	0	1	0	0
算数(数学)A	6	7	7	12	1	0	1	0
算数(数学)B	5	7	8	12	0	1	1	1
理科	10			5	4			1

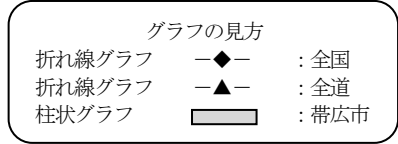


小学校においては、昨年度と比べて理科を除く4科目中、国語A・Bにおいて、学校数が減少した。一方、算数A・Bにおいては5ポイント以上下回った学校数が増加した。



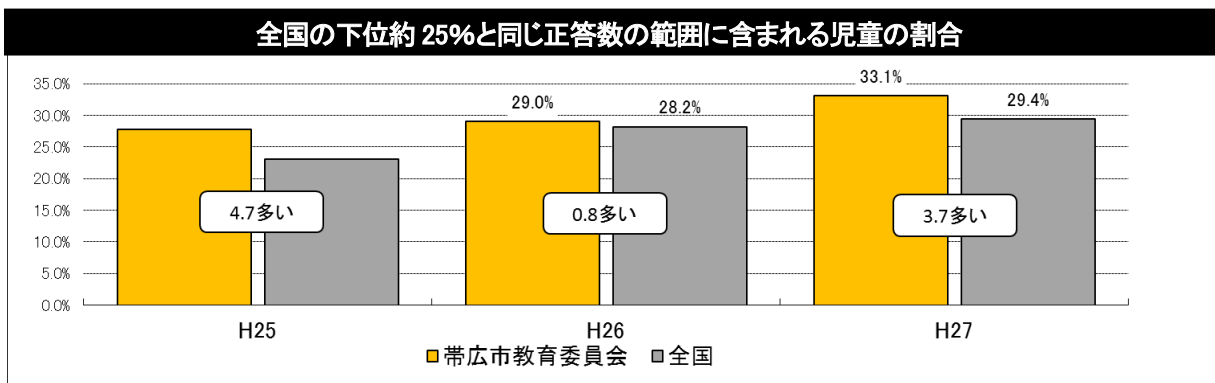
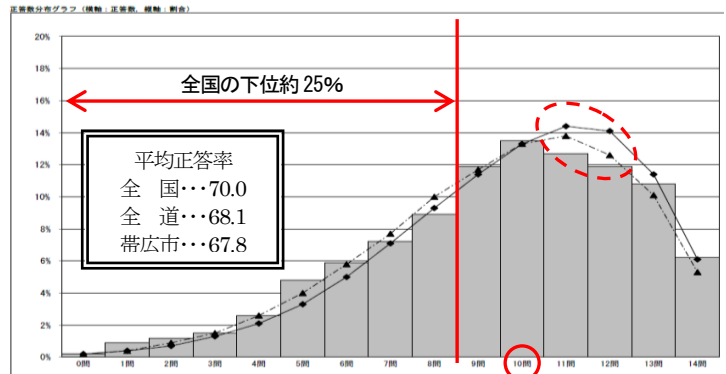
中学校においては、理科を除く4科目中、数学B（1校）以外は該当校なしだった。

3 各科目の正答数の分布



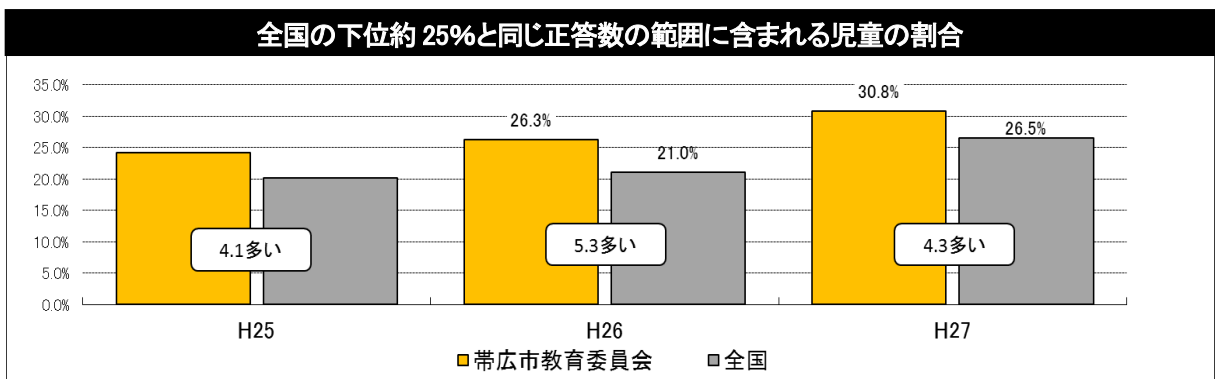
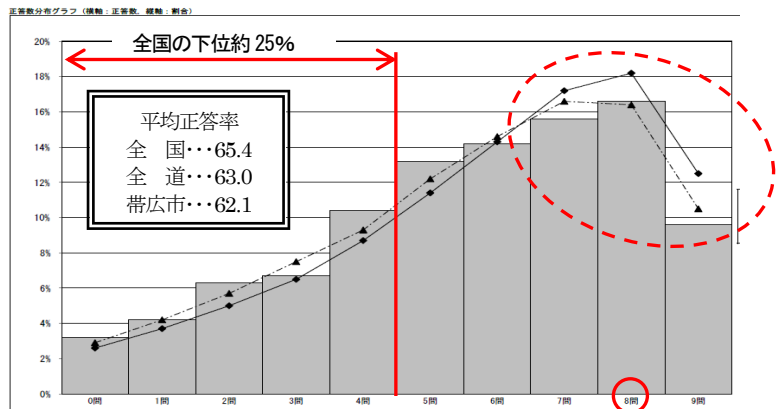
【小学校 国語A】

- ・ 14問中、正解した児童数が最も多かったのは全国が11問、本市が10問であった。
- ・ 全国と比べて14問中11問と12問正解した中間層の割合に開きが見られた。



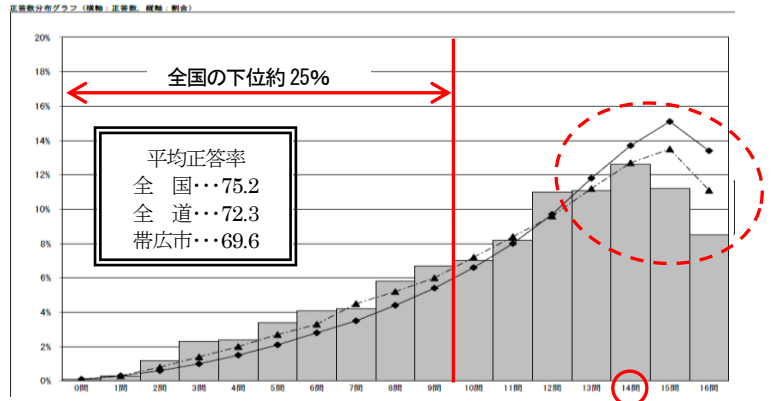
【小学校 国語B】

- ・ 9問中、正解した児童数が最も多かったのは全国同様、8問だった。
- ・ 全国と比べて、9問中7問以上正解した上位層の割合に開きが見られた。

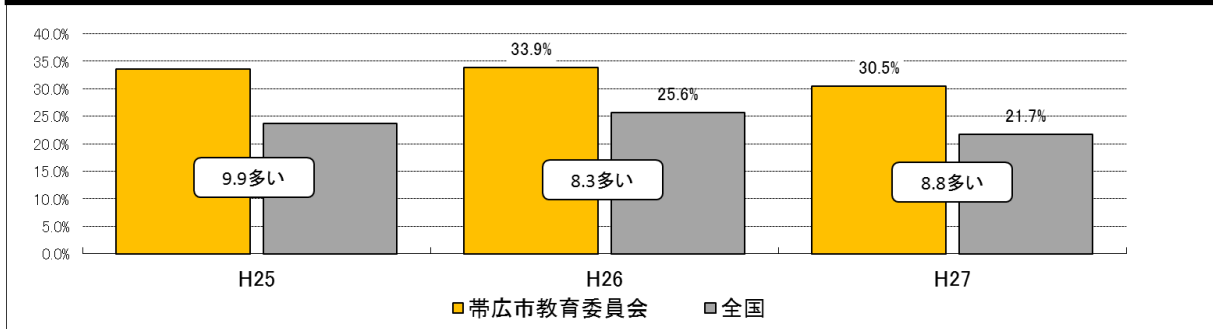


【小学校 算数A】

- ・ 16問中、正解した児童数が最も多かったのは、全国が15問
本市が14問だった。
- ・ 全国と比べて13問以上正解した上位層の割合に開きが見られた。

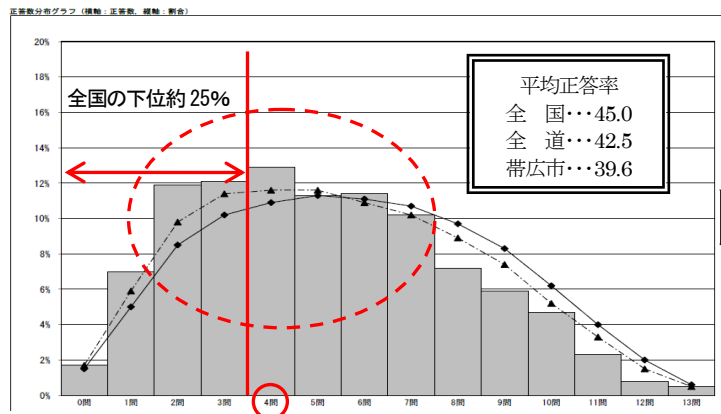


全国の下位約25%と同じ正答数の範囲に含まれる児童の割合

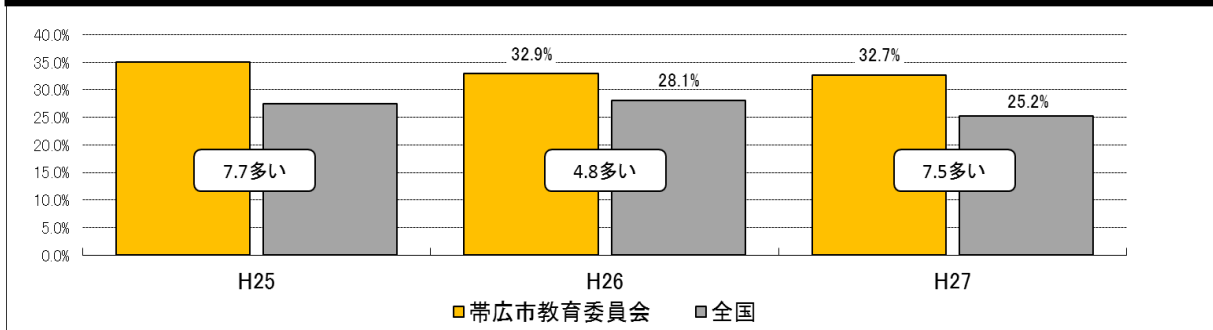


【小学校 算数B】

- ・ 13問中、正解した児童数が最も多かったのは全国同様4問だった。
- ・ 児童数の割合が2問～7問までの間に集中している。
(割合の山が全体的に左寄り)
(他教科と山の形が逆)

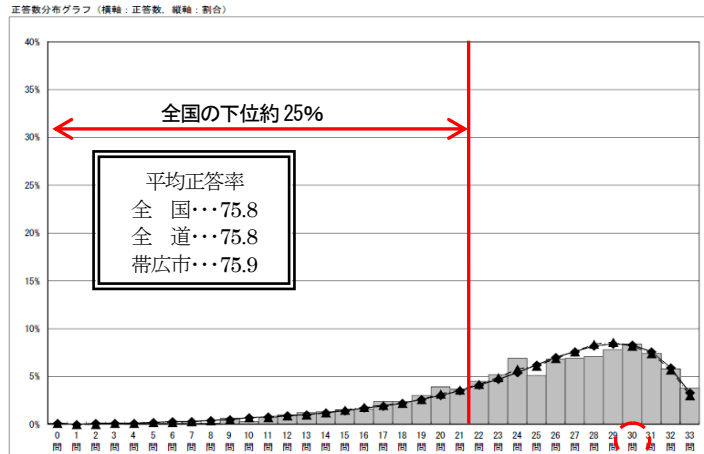


全国の下位約25%と同じ正答数の範囲に含まれる児童の割合

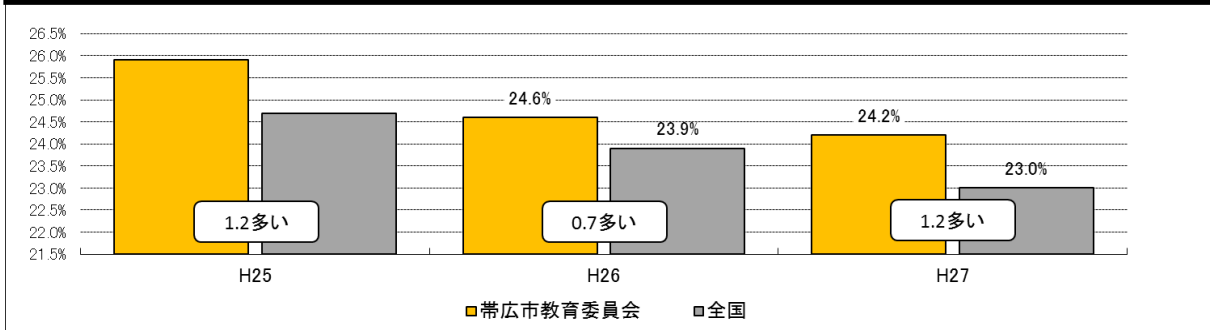


【中学校 国語A】

- ・ 32問中、正解した生徒数が最も多かったのは、全国が29問、本市が30問だった。
- ・ 全国とほぼ同様の傾向が見られた。

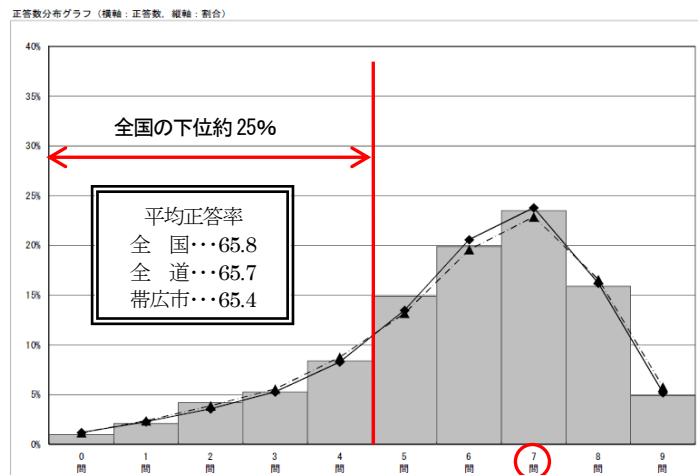


全国の下位約 25%と同じ正答数の範囲に含まれる児童の割合

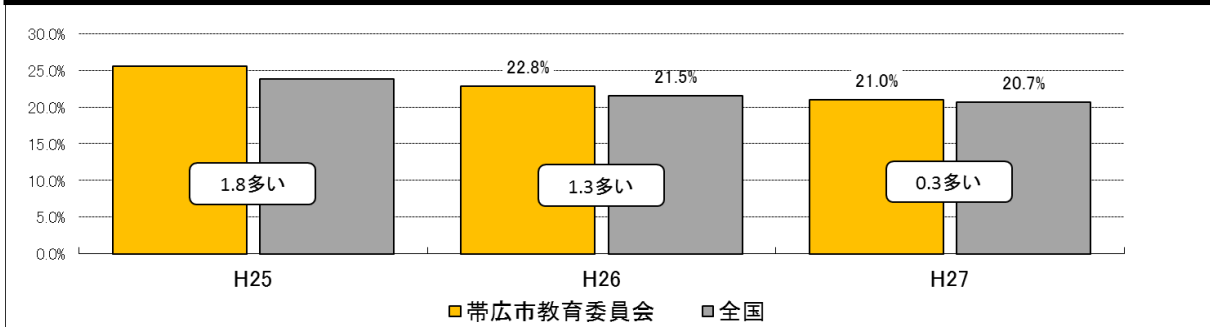


【中学校 国語B】

- ・ 9問中、正解した生徒数が最も多かったのは全国と同様に、7問だった。
- ・ 全国とほぼ同様の傾向が見られた。

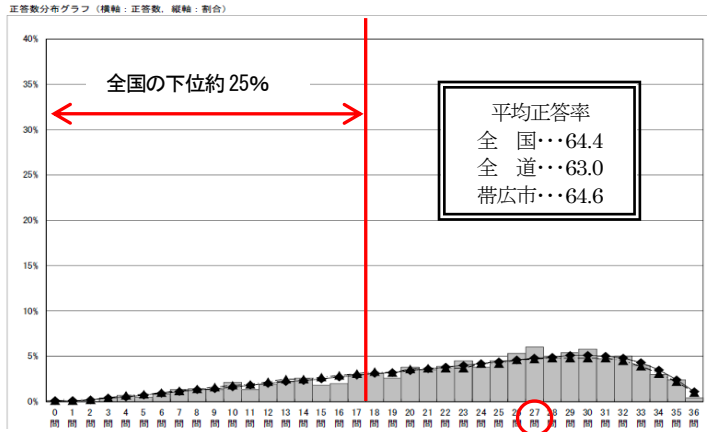


全国の下位約 25%と同じ正答数の範囲に含まれる児童の割合

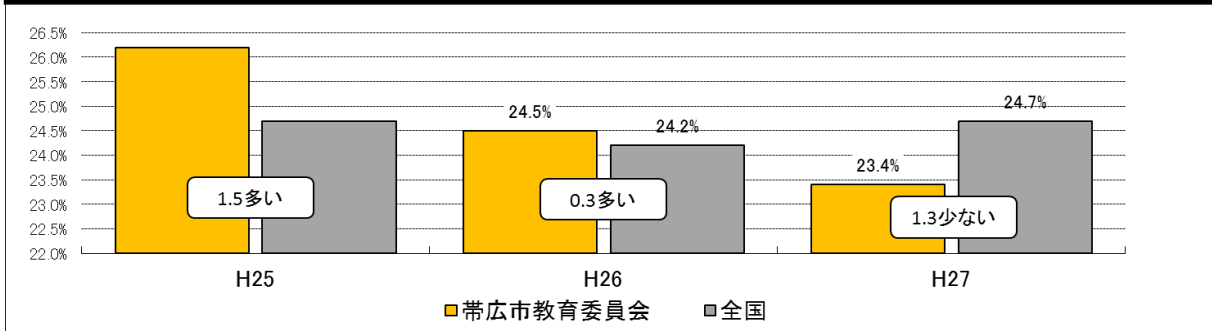


【中学校 数学A】

- ・ 36問中，正解した生徒数が最も多かったのは，全国が30問
本市が27問だった。
- ・ 全国とほぼ同様の傾向が見られるが，下位約25%に含まれる割合が全国に比べて1.3%少ない。

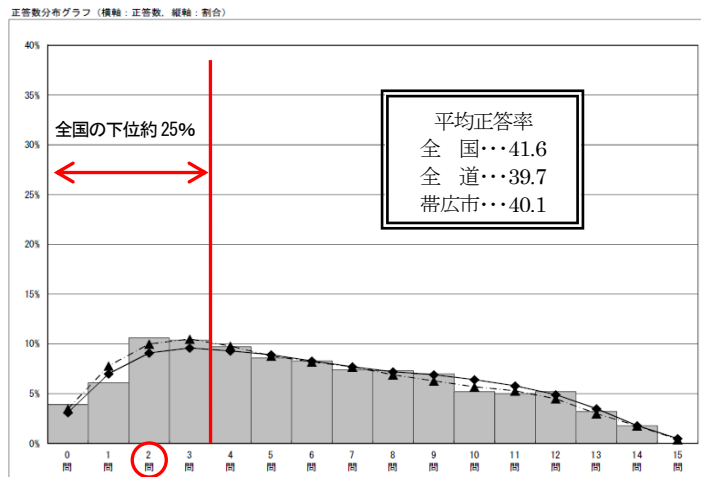


全国の下位約25%と同じ正答数の範囲に含まれる児童の割合

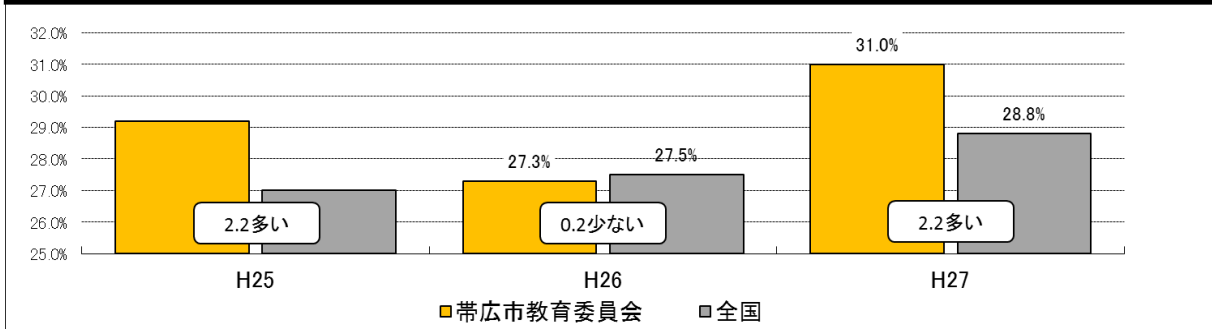


【中学校 数学B】

- ・ 15問中，正解した生徒数が最も多かったのは全国が3問，本市が2問だった。
- ・ 全国とほぼ同様の傾向が見られた。

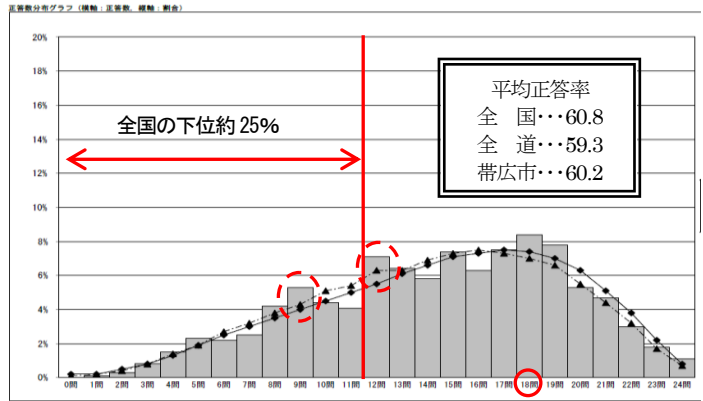


全国の下位約25%と同じ正答数の範囲に含まれる児童の割合

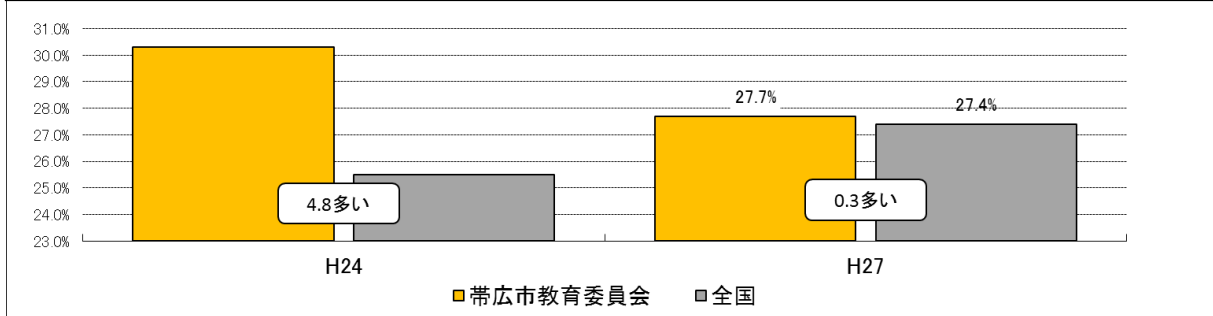


【小学校 理科】

- ・ 24問中、正解した児童数が最も多かったのは全国が17問、本市が18問だった。
- ・ 全国と比較して、9問、12問正解した児童数の割合が高かった。

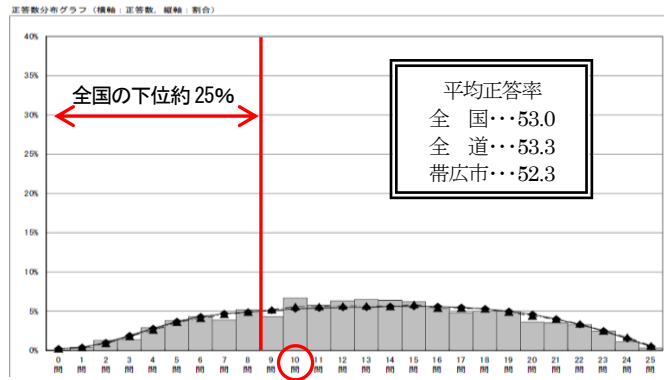


全国の下位約25%と同じ正答数の範囲に含まれる児童の割合

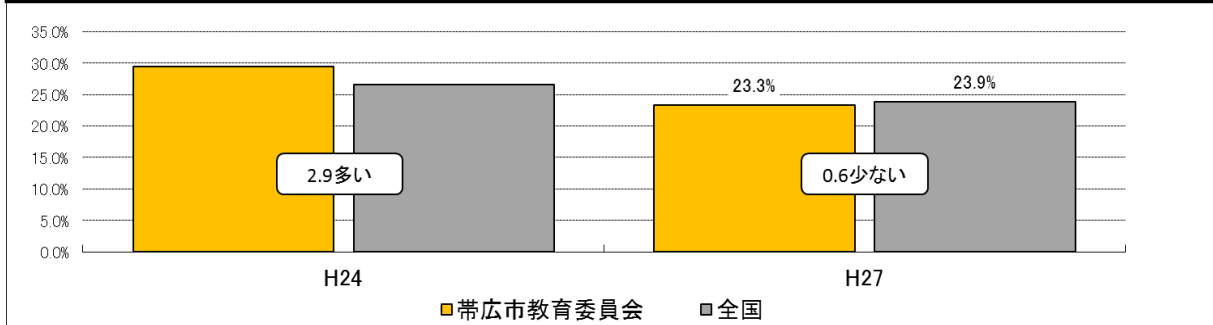


【中学校 理科】

- ・ 25問中、正解した生徒数が最も多かったのは全国が14問、本市が10問だった。
- ・ 全国とほぼ同様の傾向が見られる。
- ・ わずかだが、下位約25%に含まれる割合が全国に比べて0.6%少ない。

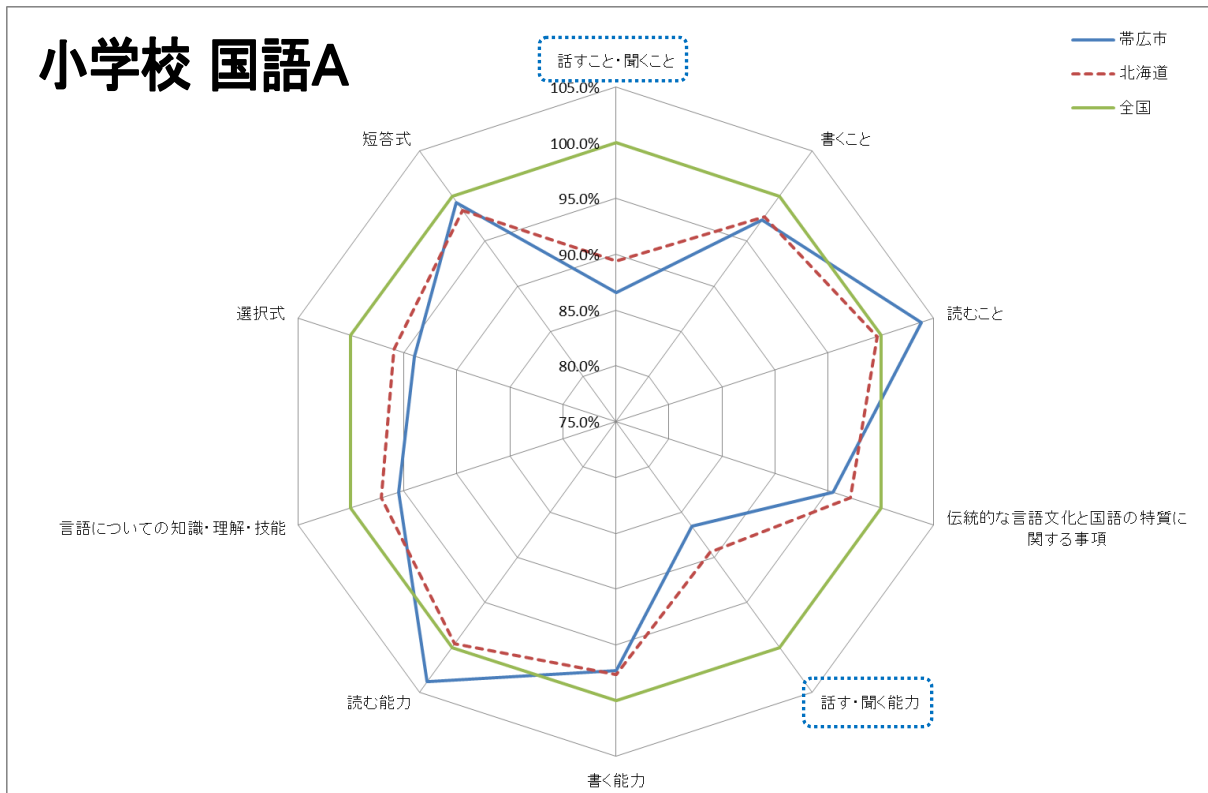


全国の下位約25%と同じ正答数の範囲に含まれる児童の割合

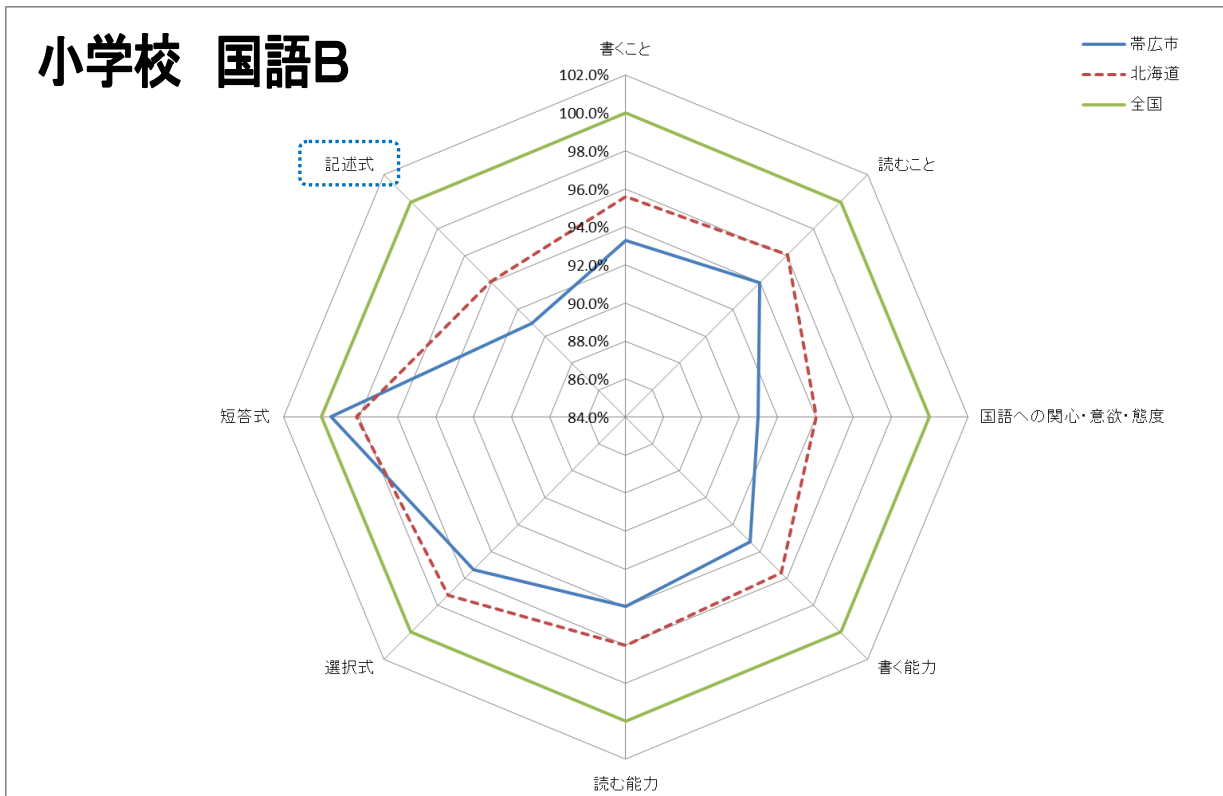


4 各領域の平均正答率（レーダーチャート図）

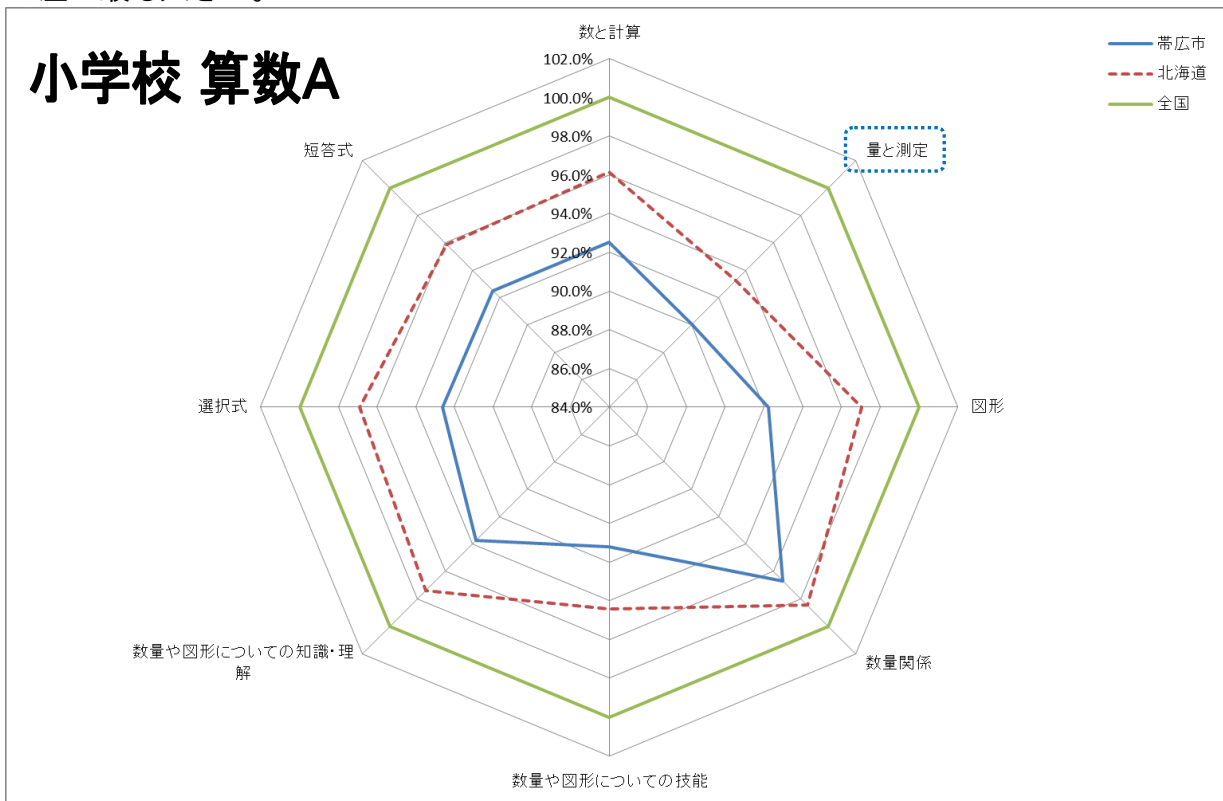
小学校国語Aでは、4領域のうち「話すこと・聞くこと」、観点別では「話す・聞く能力」が全国との差が大きい。



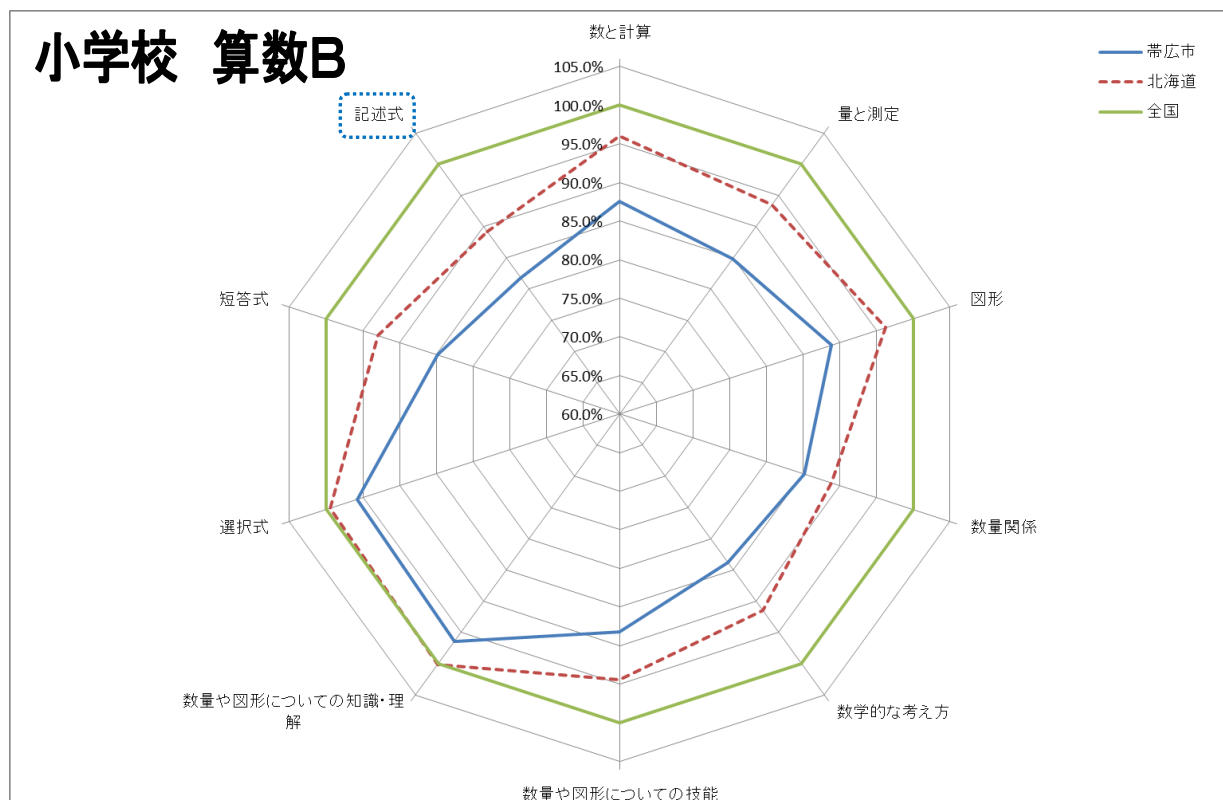
小学校国語Bでは、4領域いずれも全国平均を下回った。また、問題形式別では「記述式」で全国との差が大きい。



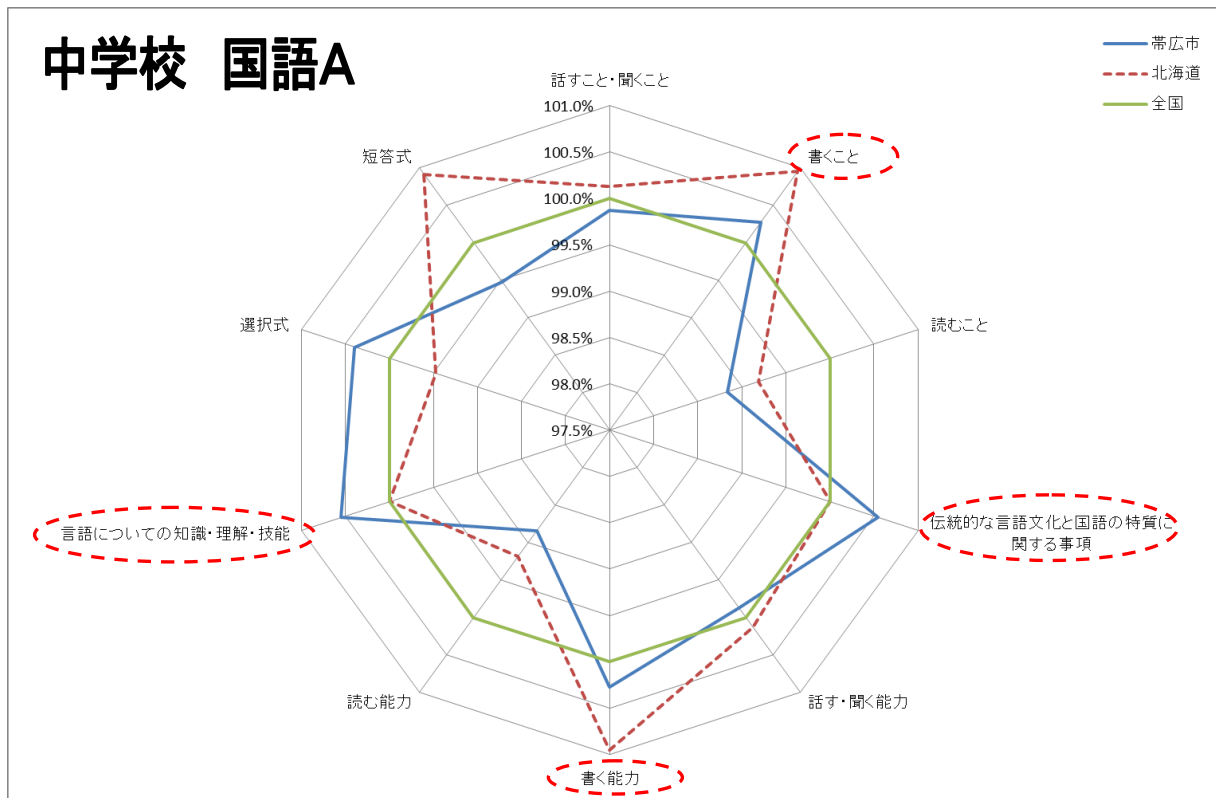
小学校算数Aでは、4領域いずれも全国平均を下回り、その中で「量と測定」が全国との差が最も大きい。



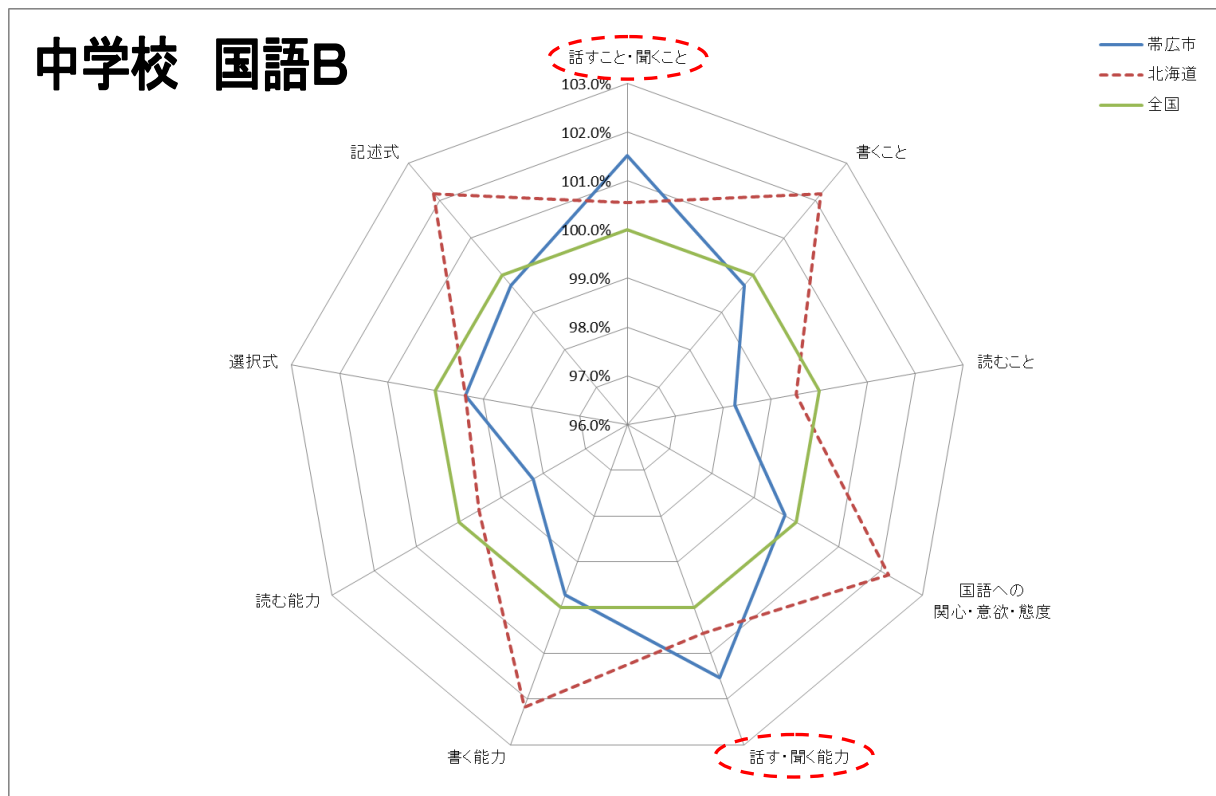
小学校算数Bでは、4領域いずれも全国平均を下回った。また、問題形式別では、国語B同様、「記述式」で全国との差が最も大きい。



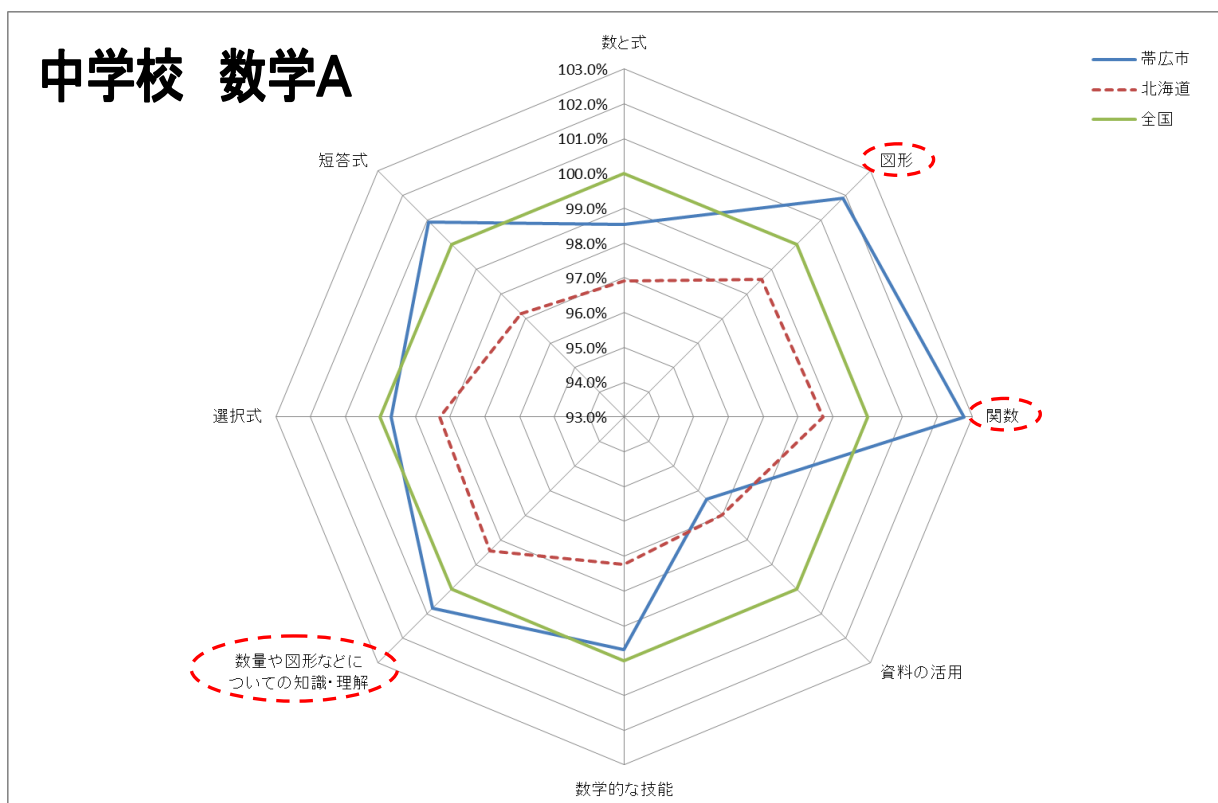
中学校国語Aでは4領域のうち、「書くこと」「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」で、また、観点別では、「言語についての知識・理解・技能」で全国を上回っている。



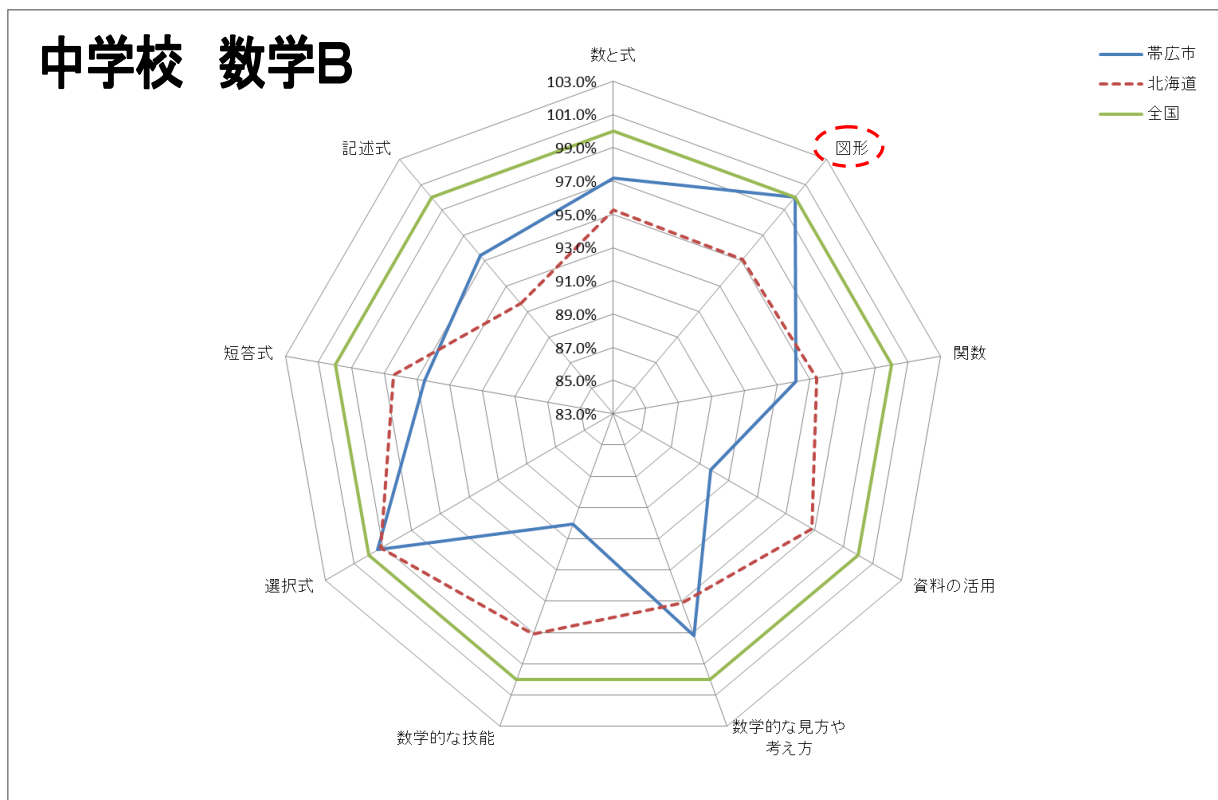
中学校国語Bでは4領域のうち、「話すこと・聞くこと」で、また、観点別では、「話す・聞く能力」で全国を上回っている。



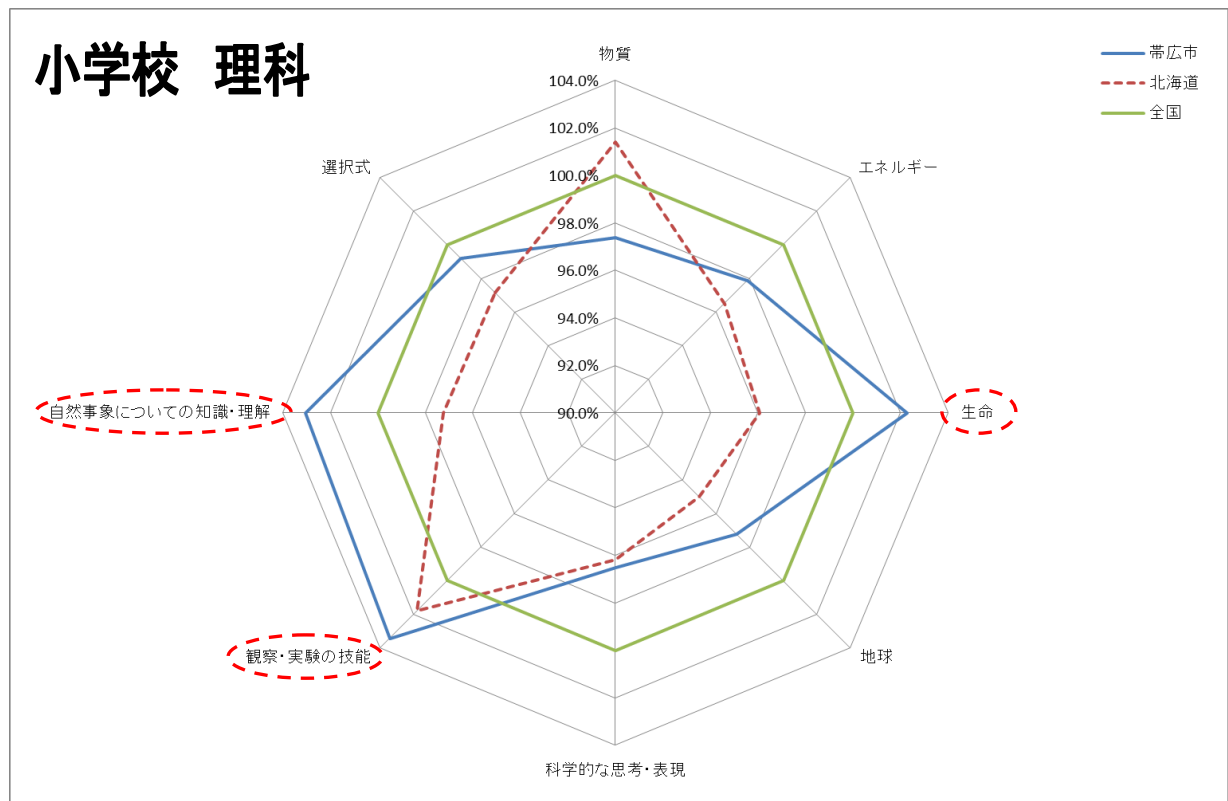
中学校数学Aでは、4領域のうち、「図形」と「関数」で、観点別では「数量や図形などについての知識・理解」で全国を上回っている。



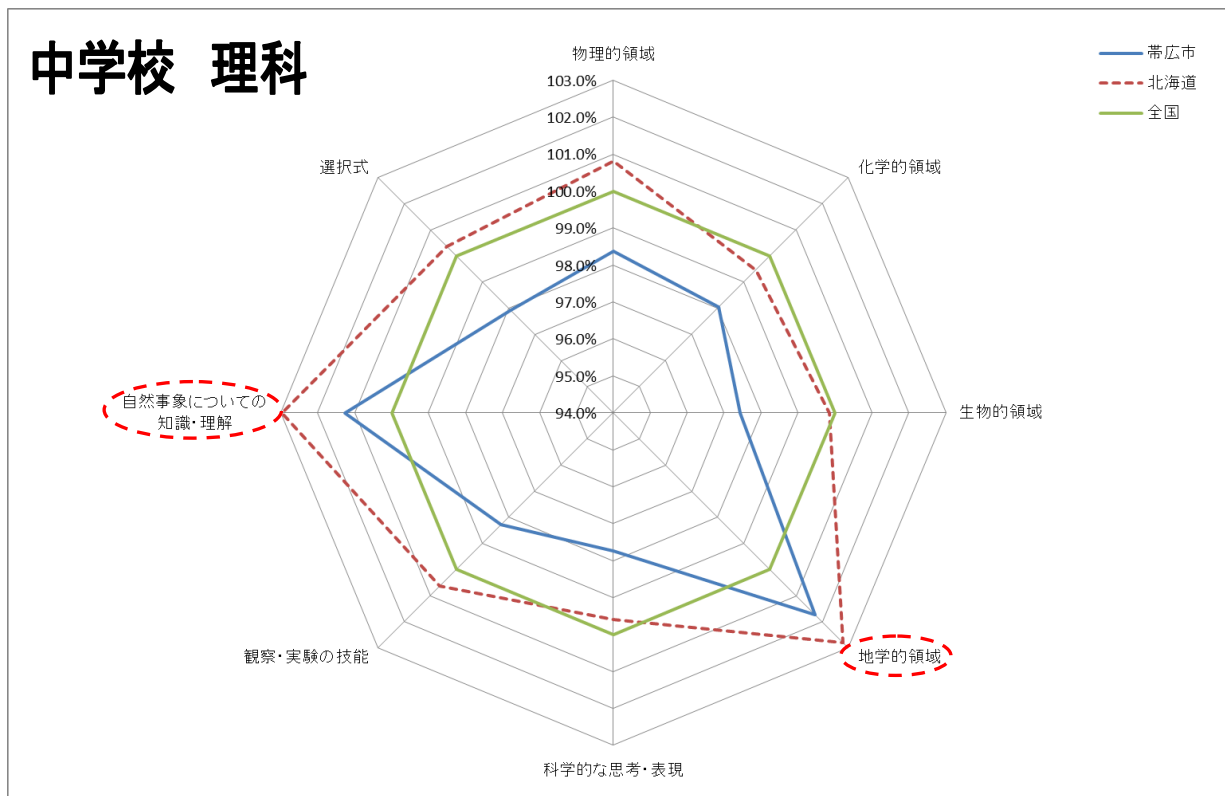
中学校数学Bでは、4領域と観点別のうち、「図形」で全国と同値だった以外は、全国平均を下回った。



小学校理科では、4区分のうち「生命」で全国平均を上回り、観点別では「観察・実験の技能」と「自然事象についての知識・理解」で全国平均を上回った。



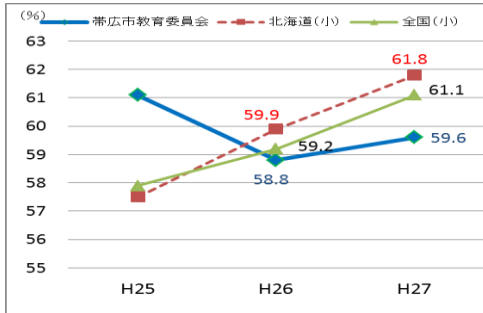
中学校理科では、分野別の「地学的領域」で、観点別では小学校同様「自然事象についての知識・理解」で全国を上回った。



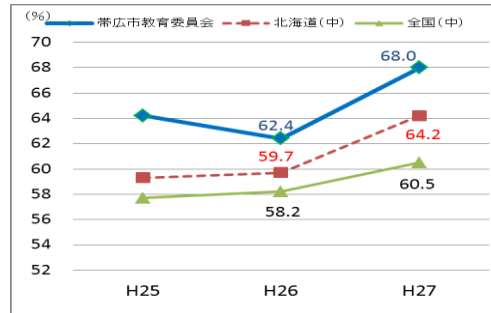
5 児童生徒の学習状況の概観（3年間の推移）について

【国語の勉強が好きな児童生徒の割合】

【小学校】

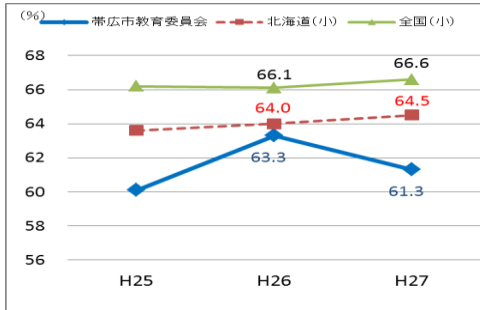


【中学校】

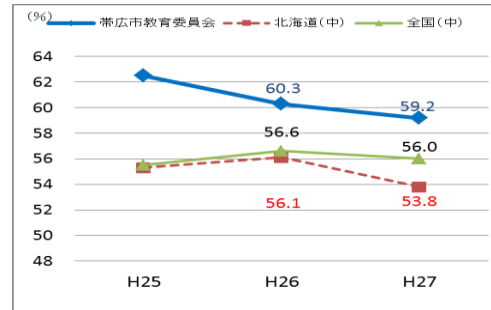


【算数・数学の勉強が好きな児童生徒の割合】

【小学校】

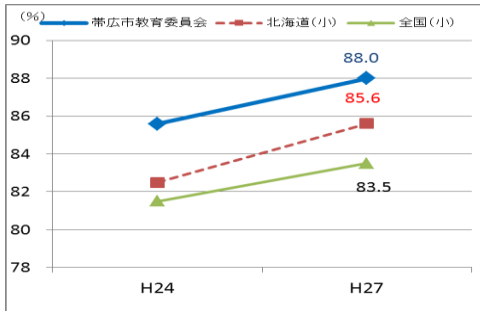


【中学校】

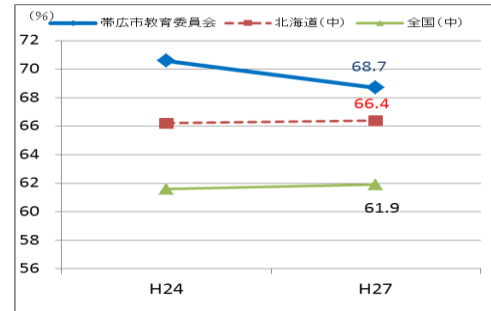


【理科の勉強が好きな児童生徒の割合】

【小学校】

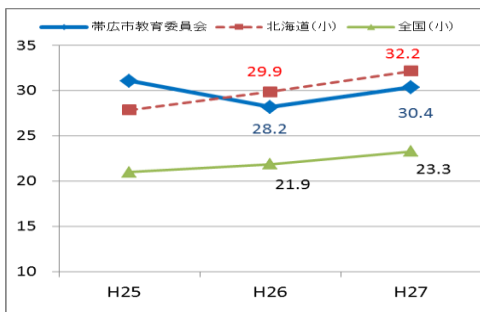


【中学校】

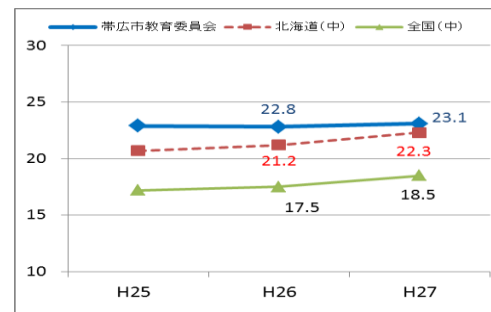


【家で授業の復習をする児童生徒の割合】

【小学校】

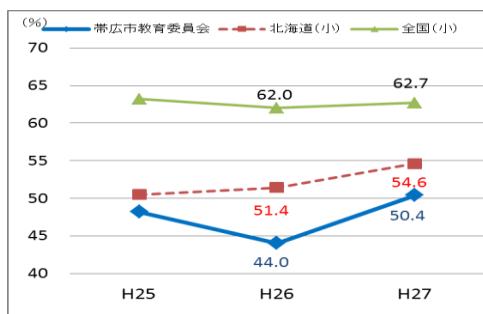


【中学校】

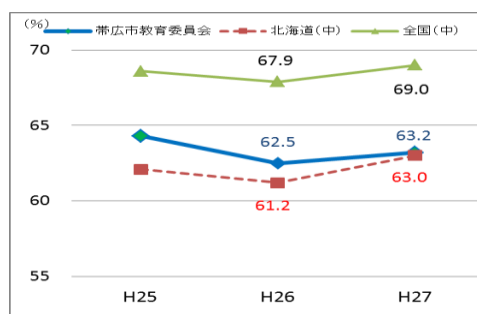


【普段1日当たり1時間以上勉強する児童生徒の割合】

【小学校】

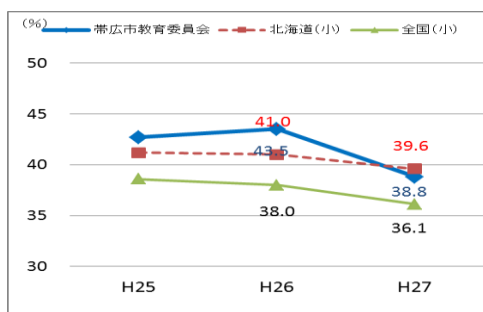


【中学校】

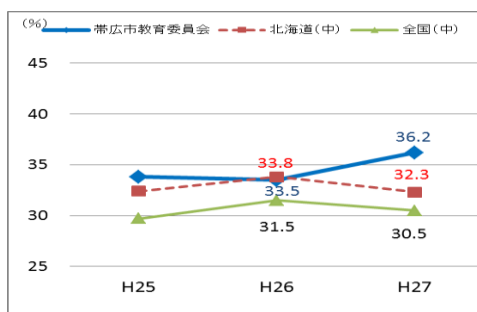


【普段1日当たり3時間以上、テレビやビデオ・DVDを見たり、聞いたり（テレビゲーム除く）する児童生徒の割合】

【小学校】

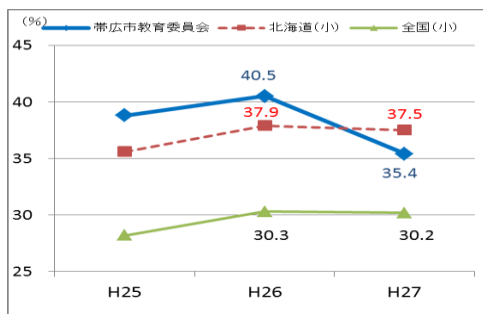


【中学校】

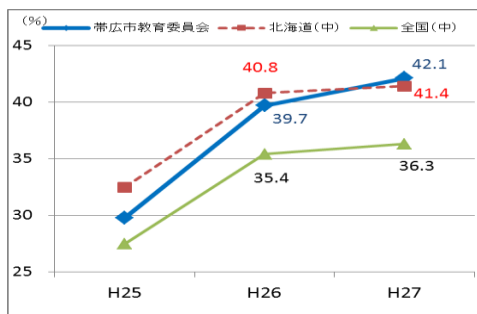


【普段1日当たり2時間以上、テレビゲーム（コンピューターゲーム、携帯式のゲーム含む）をする児童生徒の割合】

【小学校】



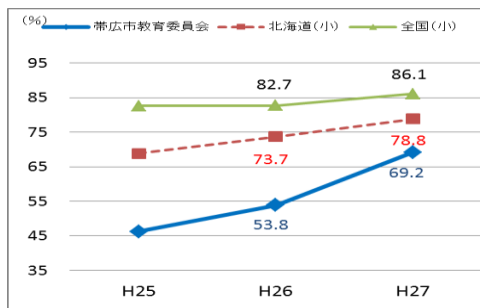
【中学校】



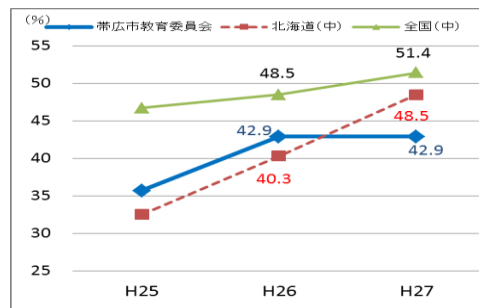
6 学校の学力向上の取組状況の概観（3年間の推移）について

【国語の指導として、家庭学習の課題（宿題）を「よく与えた」学校の割合】

【小学校】

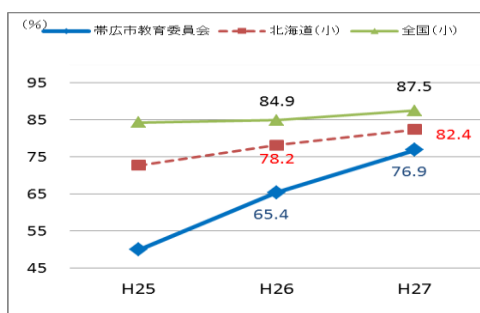


【中学校】

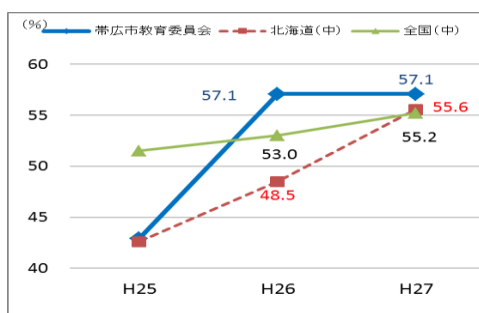


【算数・数学の指導として、家庭学習の課題（宿題）を「よく与えた」学校の割合】

【小学校】

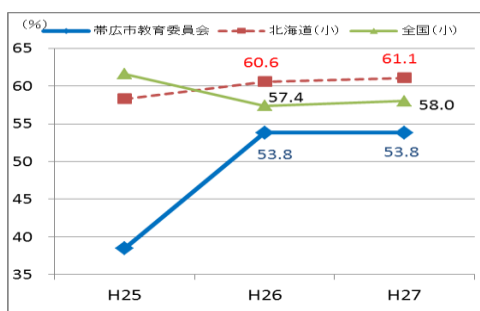


【中学校】

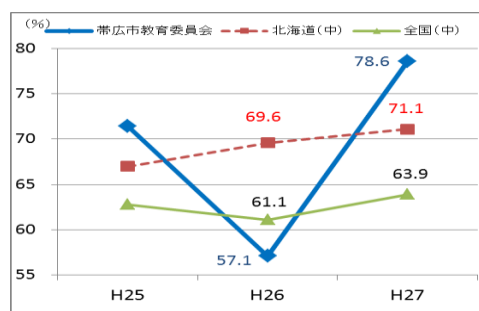


【学習規律（私語をしない，話をしている人の方を向いて聞く，聞き手に向かって話をする，授業開始のチャイムを守るなど）の維持の徹底を「よく行った」学校の割合】

【小学校】

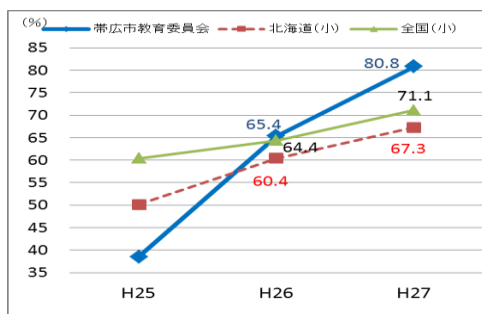


【中学校】

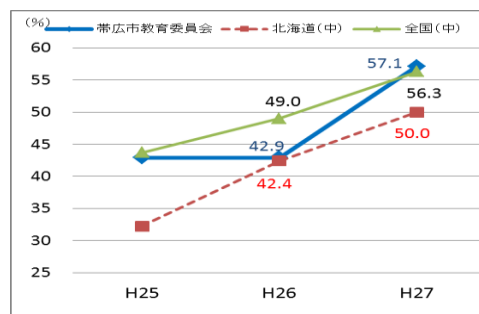


【授業の冒頭で目標を児童生徒に示す活動を計画的に「よく行った」学校の割合】

【小学校】

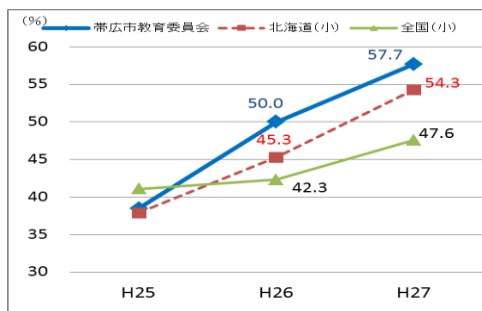


【中学校】

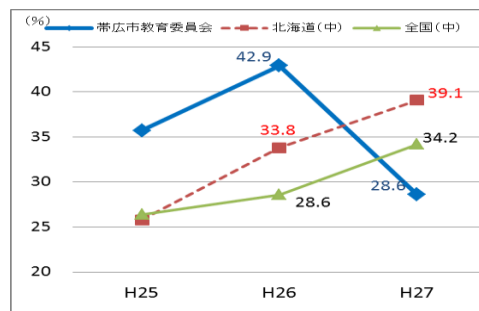


【授業の最後に学習したことを振り返る活動を計画的に「よく行った」学校の割合】

【小学校】



【中学校】



7 考 察

【児童生徒の学力の状況について】

- ・小学校では、漢字の正答率が9割を超えていますが、中学校においては小学校よりも正答率が低くなる傾向が見られ、繰り返し継続して指導することが重要であるとあらためて認識する結果となりました。
- ・小学校では国語Bにおいて全国との差が縮まる傾向が見られ、各学校の言語活動の充実をはじめとする様々な取組が反映されているものと考えています。
- ・中学校においては数学Bで－1.5ポイント全国との差が広がりましたが、その他の教科については全国を上回るか、ほぼ並んでいる状況であり、各学校の継続した学力向上への取組が反映されているものと考えています。
- ・一方、小学校では国語AB、算数ABともに学校間の差が広がる傾向が見られました。また、中学校では、国語B、数学ABで学校間の差が縮まる傾向が見られますが、数学Bにおいてはその差が35ポイント以上開くなど、個々の学校における授業改善や校内研究への取組の差が見られる結果となりました。

【児童生徒質問紙から】

小学校、中学校において、「1時間以上授業以外で勉強する」児童生徒の割合は増加傾向にありますが、依然として全国との差が大きく課題が見られます。

「1日当たり3時間以上テレビなどを見る」、「1日当たり2時間以上ゲームをする」児童生徒の割合は、小学校では改善傾向が見られるのに対し、中学校では増加傾向が見られました。

また、テレビを見たり、ゲームをする時間が「4時間以上」と答えた児童生徒の割合が全国よりも約2～3%程度多いことがわかりました。

このことから、引き続き学校として児童生徒に家庭での学習の進め方を指導するとともに、保護者と連携し、生活リズムチェックシートなどを活用しながら児童生徒の1日の生活リズムを整え、家庭での学習の習慣や有効な時間の使い方などを指導・定着させることが必要だと考えます。

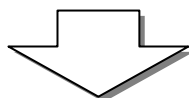
【学校質問紙から】

小中学校ともに、授業の冒頭で目標を児童生徒に示す活動を「よく行った」と答えた学校の割合は高く、全国を上回りましたが、児童生徒の同様の質問に対する答えの割合は低く、今年度も学校と児童生徒の意識の差が見られました。

一方、学習規律に関する指導について昨年度と比較すると、小学校で横ばい、中学校では大幅に改善し、8割近い学校で学習規律の徹底を行ったことがわかりました。

今後も、本調査の結果を学校全体で共有し、組織として児童生徒の学力の向上と生活習慣の改善に取り組んで行くことが大切です。

以上のことから改善の方策として、次のような取組みを継続、徹底して進めます。



- 1 授業において発問を精選し、学習量と定着やまとめの時間をしっかり確保する授業改善に取り組む。
- 2 授業時間の導入段階に、目標（課題・めあて）を提示し、児童生徒に課題意識をもたせるとともに、授業時間の終末段階で今日学習したことを確認するまとめをする。
- 3 その学年で身に付けなければならない学力を確実に身に付け、次の学年に持ち越さないようにし、さらに一定期間をおいて繰り返し学習する機会や時間を設ける。
- 4 各学校において学習規律を設定し各教室に掲示するなど、学校全体で組織として統一した取組を徹底する。
- 5 習熟の程度に応じた指導、少人数指導など、指導方法の工夫・改善に継続して取り組む。
- 6 家庭学習の時間の確保と学習習慣の定着のため、より一層家庭と情報や実態を共有し、連携を強化する。

学力や学習状況については、これまでの取組の成果が徐々に表れているところもありますが、まだまだ改善が必要です。昨年度、今年度の方策を見直しながら、各学校においてそれぞれの取組を徹底し、継続して取り組むことが一番の近道であると考えています。

学校や教育委員会は各年度の結果を受けて改善方策を再構築できるものの、個々の児童生徒にとっては一年一年が、かけがえのない時間であることを胸に刻み、今後も学力向上に関する具体的な取組を進めてまいります。

また、それらの情報は、帯広市のホームページ（教育行政“学力向上の取組”）において、適宜、公表・発信してまいります。

平成28年2月 帯広市教育委員会